
IF ~ありそうで、ない話~

五月愛珈

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

IFありそうで、ない話

【Nコード】

N4872G

【作者名】

五月愛珈

【あらすじ】

放課後の教室に残った3人は、星の王子さまをすることにした…。

「星の王子さま……星の王子さま……」

放課後の教室に響く3人の声。

楽しそうな声が暁君^{あきと}。

聞き取れない程小さい声があかり。

わたしはというと、まあ普通に参加していると思う。

何でこんな事になったかと言うと、発端は暁君だった。

従姉妹と一緒にやって面白かったんだとか。単にもう一度、やってみたかったらしい。

「お……来た来た」

3人で手を重ねるように鉛筆を持ち、鉛筆はのろのろと“はい”と書かれた方へ動き出した。

「絶対に手え離しちゃダメだからな！」

あかりの方を向き、暁君は言った。あかりは、頷いた。

「何でダメなの？」

わたしが聞いてみると、暁君は首を傾げた。

「良く分かんないんだけどさ、ダメだって従姉妹の姉ちゃんが言ってたからさ」

「そんなんで、良いの？」

「べ、別に。普通にやれば問題ないだろ。ちゃんと終わらせ方も知ってるんだからな」

“はい”に移動した鉛筆は僅かな音を立てて、拠点に戻った。

わたしの正面にあかりが黒板を背に座っていて、ちらちらと暁君の方を気にしている。

「あかり、大丈夫？」

「……あ、うん」

わたしから見て右側に、隣の席から椅子を持って来た暁君が座っ

ている。

「あかり、ビビってんのか？」

からかうような口調の暁君に対して、あかりはおろおろ視線を泳がせた。

「暁君は……怖くないの？ だって――……」

そう言って、あかりは泣きそうな顔をした。

「暁君、今日はもう止めて帰ろう？」

上目遣いであかりは暁君を、見つめている。

「んだよ、まだ始めたばっかなのに……」

不満そうな暁君に、あかりは続けて言った。

「お願いだから……」

今にも泣いてしまいそうなあかりを目にして、わたしも言った。

「今日は止めようよ。あかりがそう言ってるんだし、今度にしよう」

女子2人に言われて、しぶしぶといった感じで暁君は頷いた。

「なんだよ、つまんねー。これだから、女ってやつは……」

独り言のようにぶつぶつ不満を言った暁君を、わたしはきつとにらみつけた。

「分かった、分かったよ。星の王子さま……お帰りください」

不満そうな暁君の声のあと、鉛筆はするすると動き出した。

“いいえ”

「えっ？」

「……なんでだよ！」

あかりの顔色は白くなっている。暁君もあかりを見たあと、もう一度繰り返した。

「星の王子さま、お帰りください」

ざっと音を立てて鉛筆は動いた。

“いいえ”

「どうすんの？」

思わず大きな声を出したわたし。

「どうって帰ってもらえないだろ。星の王子さま……お願いで

すから、お帰りください」

ざざつと音がする。

“いいえ”

「……星の王子さま、お願いします。お帰りください」

あかりは左側を見ながら、震える声でそう言った。

鉛筆は、動かない……。

どうなってるの、わたしがそう思った時。

ゆつくりと鉛筆は動き出した。

“はい”

「……ありがとうございます」

暁君がそう言ったあと、重ねた手を離れた。

その次に手を離れたのはわたし。

最後にあかりが鉛筆から手を離れた。

それを見て、暁君は鉛筆を持つとばきつと半分に折った。

「……ねえ、早く帰ろう」

涙目のあかりが立ち上がる。

「そうだね」

わたしもランドセルを持って立ち上がった。

暁君はというと、特にからかいもせず、黙ってわたし達についてきた。

—— 急ぎ足で教室を出て、校門を過ぎた時。ぽつりとあかりは言った。

「……さっき。暁君の手の上から鉛筆を動かしてた人がいたの。知らない男の人」

（後書き）

私個人の意見ですが“星の王子さま”は全然怖くありません。それより“カシア”さんの方が断然怖かったです。思い出した時

「仮面の“カ”、死人の“シ”、悪魔の“ア”のカシアさん」を5回繰り返さないとカシアさんが来る！って聞いて本気で怯えました。小学生の頃ですが。関係ないですが“カシマ”さんと同類な感じ？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4872g/>

IF～ありそうで、ない話～

2010年10月28日04時11分発行